

## メッセーシアウトライン サムエル記第一26:1～25 「槍と水差し」

[1]「ジフ人がギブアにいるサウルのところに来て言った。『ダビデはエシモンの東にあるハキラの丘に隠れているのではないのでしょうか』」

「ジフ人」…ジフはヘブロンとカルメルの中間のユダの山地と死海の間の岩石の多い荒野地帯。

「エシモン」…固有名詞ではなく、荒れた所という意味。ジフの荒野から東の死海方面を見下ろした地点。「ハキラの丘」…その近くにあった小高い丘であろう。

ジフ人たちは23章でもサウルにダビデが隠れている場所を知らせに来たが、ここでもまた新しい情報を持って来た。

[2]「サウルは立って、三千人のイスラエルの精鋭とともにジフの荒野へ下って行った。ジフの荒野でダビデを捜すためであった」

サウルはダビデのいのちを狙うことを決してあきらめない。今まで何度もサウルはダビデのいのちを狙い、失敗し、あるいは誤解を解かれ、和解し、戻って行くが、またしばらくするとダビデ追討に乗り出す。彼は預言者サムエルに油注がれ、初代のイスラエルの王として任命された人物であったが、やがて、主に対する不信仰と高慢、自己中心な行いにより、主の霊は彼から離れ、代わって主からの悪い霊によって病的な錯乱にしばしば陥るようになったのであった。→16:14

そして猜疑心と嫉妬にかられ、ダビデを自分の王位を狙う者として、殺そうとしていたのであった。

[3-5]「サウルは、エシモンの東にあるハキラの丘で、道の傍らに陣を敷いた。一方、ダビデは荒野にとどまっていた。ダビデは、サウルが自分を追って荒野に来たのを見て、偵察を送り、サウルが確かに来たことを知った。ダビデは立って、サウルが陣を敷いている場所に来て来た。そしてダビデは、サウルと、その軍の長ネルの子アブネルが寝ている場所を見つけた。サウルは幕営の中で寝ていて、兵たちは彼の周りに宿営していた」

ジフ人たちからの情報により、サウルとその軍はジフの荒野のハキラの丘の道の傍らまで進んで来て、そこに陣を敷いた。ダビデの方はサウルの軍が近づいてきたのを知り、偵察を送り、確かにその事実を知った。そしてダビデはサウルとその軍の長アブネルが寝ている場所を見つけた。これは偵察に行った者が、その場所を見つけ、それをダビデに知らせたということであろう。当時は今と違って視力のすぐれた人々がおり、肉眼で遠距離でも人や物を見分けることができたと思われる。視力2.0以上か。「アブネル」…サウル軍の長でサウルの叔父であった。→14:50

[6]「ダビデはヒッタイト人アヒメレクと、ヨアブの兄弟で、ツェルヤの子アビシャイに言

った。『だれか、私と一緒に陣営のサウルのところへ下って行く者はいないか。』アビシャイが答えた。『私が一緒に下って参ります。』

「ヒッタイト人」…小アジアのカパドキア由来の民族でBC1800～1200頃にヒッタイト王国を築き、特にパレスチナ南部に多く住んでいた。アヒメレクはその末裔であろう。

「アビシャイ」…ヨアブの兄弟。彼らの母ツェルヤはダビデの姉妹のひとり。→ I 歴代 2:16 それゆえ彼らは甥にあたる。ダビデの問いかけにアビシャイが一緒に行くと答えた。

[7]「ダビデとアビシャイは夜、兵たちのところに来た。見ると、サウルは幕営の中で横になって寝ていて、彼の槍が、枕もとの地面に突き刺してあった。アブネルも兵たちも、その周りに眠っていた」

「幕営」…サウル軍の野营地 サウルの槍が枕もとの地面に突き刺してあったのは、彼が武器を粗末にする人間であったからではなく、王の所在の目印であったのだろう。寝ずの番をする者が一人もいなかったのかと不思議に思うが、その理由は後で分かる。

[8]「アビシャイはダビデに言った。『神は今日、あなたの敵をあなたの手に移されました。どうか私に、槍で一気に彼を地面に突き刺させてください。二度することはしません。』」

アビシャイは戦いにおいて豪の者であり、歴戦の勇士であった。それで腕に自信があり、「…二度することはしません」と言ったのであろう。

「神は今日、あなたの敵をあなたの手に移されました」このことばは、ダビデがエン・ゲディの洞穴に隠れており、サウルが用をたしにその洞穴の中に入って来たときに、部下たちがダビデに言ったことばとよく似ている。→24:4 ダビデの部下たちはサウルを一気に殺してしまえば、すべては片が付くと常に思っていたのであろう。

[9]「ダビデはアビシャイに言った。『殺してはならない。主に油注がれた方に手を下して、だれが罰を免れるだろうか。』」

ダビデは徹頭徹尾、主なる神を恐れる者であった。その主が油注がれてイスラエルの王とされたサウルに対して、彼が時に精神に異常をきたす者であったとしても、手を下すことはできない。これがダビデの信仰であり、その生涯を貫いての生き方であった。

[10-11]「ダビデは言った。『主は生きておられる。主は必ず彼を打たれる。時が来て死ぬか、戦いに下ったときに滅びるかだ。私が主に逆らって、主に油注がれた方に手を下すなど、絶対にあり得ないことだ。さあ、今は、枕もとにある槍と水差しを取って、ここから出て行こう。』」

前回エン・ゲディの洞穴の時よりもダビデは一步踏み込んだことばを語っている。それはサウルの死についてである。ダビデ自身は手を下さないが、主はサウルを必

ず打たれる。すなわち時が来て死ぬか、戦いで戦死するかである。これはダビデの預言的ことばであり、そして事実は確かにそのようになっていくのである。彼はサウルに手を下す代わりに枕もとの槍と水差しを取ってそこから出て行こうとアビシャイに言う。

槍はサウルの王としての象徴であり、水差しは両耳のついた瓶であったと思われ、荒野では水が貴重なのでいのちの象徴として槍とともに持ち帰ることにしたのであろう。

[12-13]「ダビデはサウルの枕もとの槍と水差しを取り、二人は立ち去ったが、だれ一人としてこれを見た者も、気づいた者も、目を覚ました者もいなかった。主が彼らを深い眠りに陥れられたので、みな眠り込んでいたのである。ダビデは向こう側へ渡って行き、遠く離れた山の頂上に立った。彼らの間には、大きな隔たりがあった」

サウルの槍と水差しを取り、二人は立ち去ったが、だれもそのことに気づかなかった。その理由は主なる神がサウルとその兵たちを深い眠りに落としていたからである。主が介入してくださったのである。ダビデはそのことを知っていたのであろうか。それはわからない。しかし、彼は主が自分のすることを最善に導いてくださると信じ、アビシャイとともにサウルの陣営に行ったのであろう。もちろん、細心の注意を払って、ひそかに行動したことは間違いない。困難な状況の中でも、主が最善に導いてくださることを信じ、自分も最善の努力をする。これは私たちが学ばなければならないことである。

そして彼らはサウルの陣営から、かなり離れた山の頂上に立った。

[14-16]「ダビデは、兵たちとネルの子アブネルに呼びかけて言った。『アブネル、返事をしないのか。』アブネルは答えて言った。『王を呼びつけるおまえはだれだ。』ダビデはアブネルに言った。『おまえは男ではないか。イスラエル中で、おまえに並ぶ者があるだろうか。おまえはなぜ、自分の主君である王を護衛していなかったのか。兵の一人が、おまえの主君である王を殺しに入り込んだのだ。おまえのやったことは良くない。主に誓って言うが、おまえたちは死に値する。おまえたちの主君、主に油注がれた方を護衛していなかったのだから。今、王の枕もとにあった槍と水差しが、どこにあるかを見てみよ。』」

ダビデは兵たちとアブネルに呼びかけた。アブネルは自分が王でもないのに、これに答えて「王を呼びつけるおまえはだれだ」と言ったのは、大声で呼んでサウル王の安眠を邪魔する者は誰だという意味。ダビデの大声はサウルをも眠りから呼び覚ました。

「おまえは男ではないか」…アブネルはサウル軍の長であり勇猛な人物で、男の中の男であったが、そのアブネルが護衛すべきサウル王を護衛できず、王の枕もとにあった槍と水差しを取られたのに気づかなかったのかとの嘲りと非難のことばである。「兵の一人」とはアビシャイのこと。

[17]「サウルはダビデの声と気づいて、言った。『わが子ダビデよ。これはおまえの声ではないか。』ダビデは答えた。『わが君、王様。私の声です。』」

時は夜明け前なので、姿形は分からないが、その声から相手はダビデであることにサウルは気づき、「…これはおまえの声ではないか」と問いかけ、そしてダビデも「私の声です」と声の主が自分であると答えた。

[18-20]「そして言った。『なぜ、わが君はこのしもべの後を追われるのですか。私が何をしたというのですか。私の手に、どんな悪があるというのですか。わが君、王様。どうか今しもべのことばを聞いてください。もし私に敵対するようあなたに誘いかけたのが主であれば、主がささげ物を受け入れられますように。しかし、それが人によるのであれば、その人たちが主の前でのろわれますように。彼らは今日、私を追い払って、主のゆずりの地にあずからせず、【行って、ほかの神々に仕えよ】と言っているからです。どうか今、私の血が主の御顔から離れた地に流されることがありませんように。イスラエルの王が、山でしゃこを追うように、一匹の蚤を狙って出て来ておられるのですから。』」

ここはダビデのいのちを取ろうと彼を執拗に追い迫るサウルに対する訴えである。

①私が何をし、私にどんな悪があるというのですか。

②もし私に敵対するよう誘いかけたのが、主であるならば、主がサウルのささげ物を受け入れられますように。すなわちダビデのいのちをサウルによって狙わせているということが、主から出ているのならば、サウルは正しいことをしているわけであり、主は彼のささげ物を受け入れてくださるであろう。

③しかし、それが人によるのであれば、その人たちがのろわれるように。彼らがしていることはダビデを主のゆずりの地(イスラエルの地)から追い出し、「行って、ほかの神々に仕えよ」すなわち真の神でない神々、偶像に仕えよと言っている。

④私の血が主の御顔から離れた地に流されることがないように。→主を知らない他国に追放され、そこで死ぬことがないように。

⑤イスラエルの王であるサウルがしゃこや蚤のように取るに足りない者(ダビデ)を追って出て来ておられる。

「しゃこ」…海に棲む蝦蛄ではなく、キジ科の鳥(うずらとキジの中間の大きさ)鷓鴣

[21]「サウルは言った。『私が間違っていた。わが子ダビデよ。帰って来なさい。もう、おまえに害を加えない。今日、おまえが私のいのちを尊んでくれたのだから。本当に私は愚かなことをして、大変な間違いを犯した。』」

サウルはダビデの訴えを聞いて正気に返る。「帰って来なさい。…」は19節のイスラエルの地から偶像礼拝の盛んな外国へ追い出されるという逃避行の状態からサウルのもとへ帰って来るようにとのことば。「…私は愚かなことをして、大変な間違いをおかした」…しかし、このようなサウルのパターンは今までに何度も繰り返されてきた。ダビデにとっては安易に信用できない。

[22-24]「ダビデは答えて言った。『さあ、ここに王の槍があります。これを取りに、若者の一人をよこしてください。主は一人ひとりに、その人の正しさと真実に応じて報いてくださいます。主は今日、あなたを私の手に渡されましたが、私は、主に油注がれた方に、この手を下したくはありませんでした。今日、私があなたのいのちを大切にしたように、主は私のいのちを大切に、すべての苦難から私を救い出してください。』」

王の槍と水差しは王の権威といのちを象徴するものであった。それを易々と取って来れたということは、そこに主の摂理のみ手が働いていたということであり、生殺与奪の権はダビデの手に握られていたのであるが、彼は決してサウルに手をかけようとはしない。それはサウルが主に油注がれて王とされた人物だからである。この信仰が彼の生涯を貫いている。「主は一人ひとりに、その人の正しさと真実に応じて報いてくださいます」(23)、「今日、私があなたのいのちを大切にしたように、主は私のいのちを大切に、すべての苦難から私を救い出してください」(24) これらのことばはまさにダビデの信仰告白である。そして確かに主なる神はそのような生涯をダビデに送らせてくださるのである。→ Iヨハネ5:14-15 主は一人ひとりに対して正しく報いてくださる。それゆえ、私たちも人をえこひいきしたり、さばいたり、嫉んだりするのではなく愛と誠実と真実をもって応答していかなければならない。

[25]「サウルはダビデに言った。『わが子ダビデよ。おまえに祝福があるように。おまえは多くのことをするだろうが、それはきっと成功する。』ダビデは自分の道を行き、サウルは自分のところへ帰って行った」

サウルはダビデを祝福し、彼のこれからの成功を告げ、帰途につき、ダビデも自分の道に行く。

今まで、しつこくダビデのいのちを追い求めたサウルであるが、彼はもう二度とダビデを見ることはない。10節のダビデの預言的ことばが実現する時がやがてやって来るのである。

私たちは不信仰に陥り、嫉妬と猜疑心に突き動かされるサウルのような生き方をするのではなく、主を恐れ、すべてにおいて主のみこころに従おうとするダビデのような生き方に習う者となることが大切である。→ マタイ7:1-5、 Iコリント6:19-20